

中山間地域の構造特性について～いわき市三和町を対象として～

福島工業高等専門学校 学生会員○佐川洋亮
正会員 齊藤充弘

1. はじめに

近年、中山間地域では高齢化と同時に年少世代の人口減少、モビリティの不備等といったことが問題となっている。特に、同じいわき市でありながら、中山間地域に位置づけられる三和町は、人口減少、基幹産業の衰退等の過疎化が問題となっている。具体的には、労働力人口、産業別人口、農家数の減少があげられる。これらの課題は、町全体の発展に影響をもたらしており、早急に解決すべき問題となっている。

本研究は、広域合併後 40 年が経過しているいわき市の中にあって中山間地域に位置づけられる三和町を対象として、その構造特性を明らかにすることである。具体的には、道路・交通体系を骨格とする空間構造特性に加えて、年齢別人口や産業別就業者数に見る社会構造特性についても明らかにすることにより、中山間地域の課題について空間的・社会的な視点より追究していく。

2. 空間構造の変化と特性

(1) 道路・交通体系

昭和 41 年 10 月に 5 市 4 町 5 村が合併して誕生したいわき市においては、旧町村に該当する三和、川前、遠野、田人の 4 地区を中山間地域として位置づけることができる。国土地理院発行の五万分の一地形図を用いた経年別にみるいわき市中山間地域の骨格の変容について分析した結果、4 つの地区いずれも合併の時期を境に幹線道路が年々形成されているということがわかった。これは、合併による広域的な道路体系構築の検討が必要となり、中山間地域にも道路が建設されてきたことによるものと考えられる。図 1 にみるように、最終的に遠野、川前地区は 5 本、田人、三和地区は 6 本と、それぞれの中山間地域において同様に骨格となる道路・交通体系が形成されてきたことがわかる。

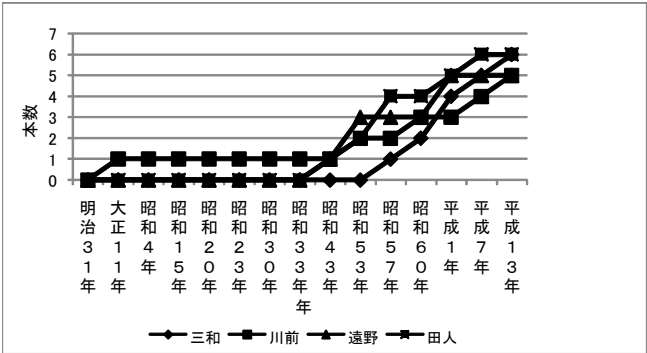


図 1 中山間地域における幹線道路の整備

(2) 三和町の空間構造の変化と特性

三和町を対象として、国土地理院発行の五万分の一及び二万五千分の一地形図を用いて、道路や学校、郵便局等の公共施設整備の変化についてみると、合併後の幹線道路の整備とともに町内の補助幹線道路や生活道路が整備されてきている。また、道路の整備とともに工場の立地もみることができ。これを、町内の大字単位の 11 地区毎にみたものが表 1 である。施設・機能についてみると、道路については各地区同様に整備されているということができるが、その他の施設については小中学校が立地する地区を中心に立地しているのを見ることができ。特に、国道 49 号や磐越自動車道の三和インターチェンジの位置する下市萱、合戸の両地区においては立地する施設も合計 16、12 とその数が多いのを見ることができ。また、町の空間を構成する自然・歴史要素については全地区に渡って見ることができ、自然・歴史の豊かな町の特性を反映しているということができる。

3. 社会構造の変化

(1) 年齢別人口

合併後の昭和 45 年以降の国勢調査報告を基に年齢階級別人口のデータベースを作成し、経年分析をしたものが図 2 である。総人口は減少している中で、10

表 1 大字別にみるまちづくり資産の分布(三和町)

	施設・機能							自然・歴史						合計
	いわき市三和支所	道路	小・中学校	郵便局・農協	工場	駐在所・消防署派遣所	飲食店・コンビニ・農産物直売所	川	山	温泉	史跡	寺社	小計	
上三坂	0	4	0	1	0	0	2	1	2	0	1	2	6	13
中三坂	0	3	1	0	1	1	3	1	0	1	0	2	4	13
下三坂	0	4	0	0	0	0	0	4	1	1	0	1	3	7
差塩	0	4	1	1	0	0	1	7	1	1	0	2	4	11
上永井	0	3	0	0	0	0	1	4	1	0	0	2	3	7
下永井	0	3	2	1	0	0	0	6	1	1	0	2	4	10
合戸	0	4	0	1	1	1	5	12	1	2	1	2	6	18
渡戸	0	4	1	0	0	0	1	6	1	0	0	2	3	9
中寺	0	3	1	0	1	0	1	6	1	0	0	2	3	9
下市萱	1	5	1	1	0	2	6	16	1	1	0	2	4	20
上市萱	0	3	0	1	0	0	1	5	1	2	0	1	4	9
計	1	40	7	6	3	4	21	82	11	10	2	1	20	126

キーワード：地方都市、中山間地域、空間構造、社会構造、まちづくり

連絡先：〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾 30 福島工業高等専門学校建設環境工学科 TEL 0246-46-0830

歳階級別にみても、その変化に特徴をみることができる。0～9 歳、10～19 歳については一貫して減少している。その一方で、20～29 歳については昭和 50 年から 55 年にかけて一時増加しており、30～39 歳については昭和 55 年から 60 年にかけて増加している。さらに、40～49 歳については昭和 45 年から 50 年にかけてと平成 2 年から 7 年にかけて増加しており、50～59 歳については昭和 45 年から 60 年にかけて増加している。60～69 歳については一貫して増加しているものの、平成 7 年から 12 年にかけては減少しており、70 歳～については一貫して増加していることがわかる。このように人口総数としては減少しているものの、年齢階級別にみても階級により増加した時期を確認することができる。

（2）産業別就業者数

年齢別人口と同様に産業別就業者数の変化をみたものが、図 3 である。これをみると、第 1 次産業就業者数については一貫して減少傾向にあり、第 2 次産業及び第 3 次産業就業者数については平成 2 年までは一貫して増加し、産業構造の高度化が表れる形となっている。しかしその後は、総人口の減少に表れるように産業別就業者数についても全体として減少傾向にあることがわかる。

4. 三和町の構造特性

（1）人口変化にみる特性

人口の変化について、町内を大字単位の 11 地区毎にみても、20～29 歳の人口が増加した昭和 50 年から 55 年にかけては、三和町全体としては-6.2%の減少率であるにもかかわらず、上三坂(増加率 225.6%)、下三坂(同 176.6%)、合戸(26.2%)、下市萱(同 139.7%)において人口が大きく増加しており、町外より人口が流入してきたことを確認することができる。

（2）産業別就業者数にみる特性

人口の変化と同様に産業別就業者数の変化について、昭和 50 年から 55 年にかけてみても、全体として-2.8%の減少率であるにもかかわらず、大分類では第 1 次産業の林業・狩猟業(増加率 29.3%)、第 2 次産業の鉱業(同 100%)、建設業(同 12.7%)、製造業(同 28.6%)、第 3 次産業の電気・ガス・熱供給・水道業(同 115.4%)、公務(同 78.0%)については大きく増加しており、人口変化に影響を与えたといえる。

5. おわりに

いわき市三和町を対象とする本研究の成果として、以下の点をあげることができる。

第一に、広域合併都市いわき市の空間構造変化における中山間地域の位置づけを明らかにすることができた。三和町は、他の中山間地域と同様に広域ネ

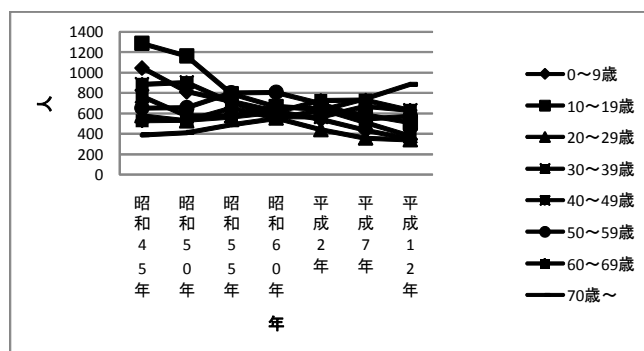


図2 年齢階級別人口の変化

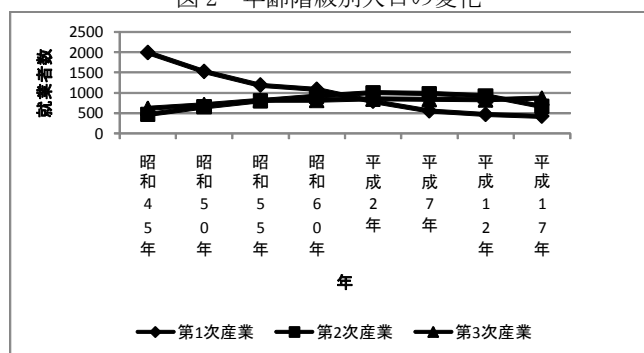


図3 産業別就業者数の変化

ットワークの形成と共に施設・機能が集積してきた。

第二に、社会構造の変化を明らかにする中で、年齢階級別人口と産業別就業者数にみるその特性を示すことができた。総数としては一貫して減少傾向にあるものの、年齢階級別にみると20～29歳の昭和50年から55年にかけてをはじめ、増加した時期もあり、人口階級別にその変化に特徴があることを示すことができた。

第三に、空間構造の変化と社会構造の変化の関連を考察することができた。国有林である杉林の植林に伴う林業就業者数の増加、工場の立地に伴う製造業就業者数の増加等、空間構造の変化との関連を考察することができる。同じ時期には、幹線道路も整備され、町内における施設・機能の集積が進んだ時期とも関連することがわかる。

一連の調査・分析を通して、中山間地域においても公共施設の整備や就業の場が創出され、人口の流入がみられた時期もあったことがわかった。しかしながら、それが継続する形とはならず、一時的な流入に止まっているのが実態であり、中山間地域の特性であるということが出来る。人口減少時代に入ったこれからの時代においては、表1に示すような自然・歴史をまちづくりの資産として、都市部との交流を通じた交流人口の拡大や周辺地域との連携を構築することが必要であるといえる。

参考文献

- 1) 国土地理院：五万分の一地形図、二万五千分の一地形図
- 2) 総務省：国勢調査報告